

徹底的行動主義は仏教から何を学ぶべきなのか？

渡 辺 修 宏
森 山 哲 美

What Should Radical Behaviorism Learn from Buddhism?

Nobuhiro Watanabe & Tetsumi Moriyama

abstract

We studied views of Buddhism and radical behaviorism about control of human behavior in this article. The reason why we investigated those views is that both practices deal with a matter of life of human being. From our investigation, we found that both practices produced diverse practices, but that they shared views about control of human behavior. On the basis of such similarities, we discussed in behavioral terms what radical behaviorism should learn from Buddhism about control of human behavior. From the discussion, we conclude that behavioral education based on Buddhism is absolutely necessary for control of human behavior.

Keywords: Buddhism, radical behaviorism, control of human behavior, education

はじめに

人には、自然界の現象やヒトを含めた生物界の現象を意のままに操作しようとする傾向がある。そのような操作には、ヒトを含めた生きとし生けるものの生存可能性を高めるような操作もあれば、逆に生存可能性を低下させ、ひいてはすべての生物種の絶滅を招く可能性のある操作もある。これらの操作はヒトだけに限ったことではないが、ヒトによる操作は、その強さ（レベル）においても、また操作対象の範囲においても、他の生物種による操作の比にならない。

現代社会に生きる私たちは、紛争やテロ、あるいは世界経済の危機、さらに地球規模の気候変動など多種多様な解決困難な問題を抱えている。そして、それらの問題の解決に手を拱いて状況が好転するのを待つわけにはいかない。そこには当然、問題解決のための操作が必要となる。人による操作とは、つまるところ人の行動である。したがって、そのような問題の解決には、人類は自分たちの行動を制御する術を知る必要があるだろう。

行動を制御する術として人類史を見ると多種多様な方法が考案されてきた。それらの中には、説得や脅し、あるいは約束や契約といった人の言語行動を主体にするものや、宗教、医療、福祉といった実践活動、さらに科学によって明らかにされた原理に基づく技術などがある。

行動の制御を問題にするにあたって、本論文は、行動分析学の哲学的基盤である徹底的行動主義と、宗教的实践である仏教のそれぞれの視点を論じ、両者を比較するつもりである¹⁾。両者を問題

にした理由は、どちらも人の行動の制御を問題にしていること、さらにそれらがともに人の行動が招いた多種多様な解決困難な問題を取り扱う上で有効な手立てを提供する可能性が高いと考えたからである。しかし、仏教は人智が行き着くところまで行き着いた唯一絶対の真理である以上、仏教と徹底的行動主義を比較することは、本来的に意味をなさない（森, 2016²⁾）。したがって、ここで試みられる両者の比較は、後述されるように、徹底的行動主義が仏教から学ぶべき事柄を模索するための単なる試みであるのご理解いただきたい。

歴史的にみると、両者の勃興の時期には格段の時間差がある。仏教は、今から約 2500 年前のゴータマ・シッタッタ（以下、釈尊）の誕生以来、進化ならびに継続してきた宗教であるが、徹底的行動主義は、William James と物理学者の Ernst Mach の実用主義的視点、さらに J. B. Watson の行動主義に由来する Skinner が提唱した行動の科学（行動分析学）についての哲学であり、現在に至るまでにたかだか 100 年程度の歴史しかない。その両者を関連付けることの意味は、行動の制御にかかわる科学と宗教の比較となるであろうし、その比較によって人の行動の理解が深まる可能性があるということである。そして、そのような理解によって、私たちが抱える複雑で解決困難な現代的課題に対処するための知見が得られる可能性があるかもしれない。

両者を比較して人の行動の制御について新たな知見を得ようとする試みは、畢竟、宗教と科学の融合と解されるかもしれない。しかし本論文の主題は、上で述べたように、両者の単なる比較というよりは、徹底的行動主義がさらに発展する可能性と方策を仏教から学ぶことである。徹底的行動主義は、仏教と比べてその歴史の長さは圧倒的に短い。さらに仏教は唯一絶対的真理の直覚である（森, 2013³⁾）。そうであれば、徹底的行動主義の視点が今後も持続的に発展するには仏教から学ぶことは大いにあるはずである。そこで本論文では、もっぱら仏教が論じている人の行動の制御について述べ、徹底的行動主義の視点からその制御をどのように捉えることができるのかについて論じることにする。つまり人の行動の制御について仏教の視点を行動的に解釈するつもりである。

仏教と科学の比較は、これまでも広く一般的に行われている（例えば、佐々木, 2013）。それに対して仏教を行動の視点、特に徹底的行動主義から解釈した研究はそれほど多くはない（しかし、Baum, 1995; Diller & Lattal, 2008; Bass, 2010; Williams, 1977; 1986 などがある）。これからそれを論じていくにあたって、行動の制御についてのそれぞれの視点を概観したい。

仏教の祖は周知の通り釈尊である。今からおよそ 2500 年前、現在のネパール領のルンビニーで、釈尊はシャカ族の王子としてお生まれになった。何不自由のない生活を送りながらも釈尊は若いときから生と死の問題に苦慮して解脱を志向された。苦行の後ガンジス川中流の南方にある、のちにブッダガヤーと呼ばれた地の菩提樹の下で沈思冥想に耽り数日を経て悟りを開かれたという。その教えは「生きること、それ自体が苦しみである。正しい生き方をすることで、この苦しみから逃れることができる」であった。この苦しみからの解脱の方法は、後述する八正道としてまとめられている。その要は、中道である。

一方、徹底的行動主義は、上述のようにアメリカの心理学者である B. F. Skinner の視点である。彼は行動の科学としての実験的行動分析学を確立し、その哲学的基盤として徹底的行動主義を提唱した。この基盤に立つことで実験的行動分析学は、行動を制御している環境変数を明らかにすることができる。そして徹底的行動主義は、ヒトとヒト以外の動物の行動を制御している原理を記述し、この制御における環境の役割を重視する立場をとる。

仏教と徹底的行動主義のそれぞれの視点は、一見するとまったく異なるように見える（Worrall,

2004)。徹底的行動主義は科学を導き、仏教は宗教である。科学と宗教のそれぞれの目標は異なるわけで、目標達成の方法も異なる。そのため科学と宗教は互いに重なりを持たない厳然たる人の営み(NOMA)であるとする立場の学者もいる(Gould, 1999)。すなわち、科学と宗教は双方で他を干渉することなくまったく独立であるべきであるという立場である。

しかし一方で、両者の間に共通性があるのであれば、それを見つけることはそれぞれを分析する上で有益であるとする立場もある(Galuska, 2003)。そうであれば、科学と宗教の違いを論じるよりも、両者の共通性を議論した方がよいだろう。共通性にかかわる議論は社会の重要な問題に対して新たな解決をもたらすことになるかもしれない。

そこで本論文では、人の行動の制御について仏教を行動的に解釈するために、仏教と徹底的行動主義のそれぞれが、人の行動と人の行動の制御をどのように捉えているのかを論じる。それによって、両者の間で認められる共通性から、徹底的行動主義が仏教から学ぶべきことを明らかにする。

仏教と徹底的行動主義の間には、片や宗教、片や科学の哲学的基盤といった違いがある。にもかかわらず、仏教が徹底的行動主義にとって重要であるという理由は、Diller & Lattal (2008)によれば少なくとも以下の3つである。

1. 徹底的行動主義は、仏教から環境と行動の関係を記述する方法について洞察を得ることができる。この洞察によって行動分析学は、この学問に適した用語と概念を考案することができる。徹底的行動主義だけでは、それは無理であろう。
2. 徹底的行動主義が他の哲学体系の中でどのような位置づけにあるのかをさらに知ることができる。それによって徹底的行動主義という哲学体系そのものも明確になる。
3. 徹底的行動主義とまったく異なるように見える他の哲学体系と徹底的行動主義を比較するためのモデルとなる。そのような比較によって、異なる領域間での対話が可能になる。これによって徹底的行動主義と他の哲学体系との統合が可能になる。両者を比較することで、それぞれの体系を批判的に分析して、異なる世界観の間で情報を広めることができる。

Diller & Lattal (2008) が指摘した上の3つの事柄を考慮すると、人の行動の制御に関して徹底的行動主義と仏教の共通性を見出すことで、徹底的行動主義のさらなる発展の方策を見出すことができるかもしれない。

人の行動とその行動の制御にかかわる仏教と徹底的行動主義の視点

仏教と徹底的行動主義のそれぞれは、人の行動をどのように捉え、そして行動の制御をどのように説明しているのかについて述べる。仏教では、人の行動は生きることと説明されている。徹底的行動主義も、人の行動は人の生の営みの総体であると定義している。したがって、人の行動の捉え方は両者で同じである。しかし仏教では、生きるという生の営みには無明や煩惱によって生じる苦という精神的な活動が伴うと考えられている。その意味で生物学的な営みとしての生きるという行為と精神的活動は仏教では分離されているようである。仏教の場合、徹底的行動主義の言葉で語るのであれば、公的な行動と私的な行動は分離して考えられているのではないだろうか？そしてその焦点は、仏教の場合、私的な行動にあるように思われる。それに対して、徹底的行動主義が捉える行動の定義は仏教の捉え方と異なるかもしれない。徹底的行動主義では、精神的活動は、個体の私

的反応（私的出来事）であり、他者から観察可能な公的な活動と同じ原理に従って生起する行動と捉えられている。行動の捉え方に対して上記のような違いが両者にはあるように思われる。

次に行動の制御についてみるならば、仏教の場合、まず私的な行動の制御が中心となるのではないだろうか？つまり仏教では、私的出来事の制御によって公的行動の制御が可能になると考えられているのではないだろうか？しかし仮にそうであっても、呼吸法を焦点化した瞑想や、後で述べる八正道ならびに律と呼ばれる法的なルールによる行動を制御することを重視している点は、仏教においても公的行動の制御を志向していると言えるかもしれない。偶像崇拜について釈尊は否定したにもかかわらず、釈尊以降、仏像が製作されたり、仏塔や寺院が建立されたり、あるいは僧たちの集まりであるサンガが組織されたのも、僧たちの仏教修行に関わる公的行動を制御しやすくするための弁別刺激としての機能をそれらに持たせるためなのかもしれない。

一方、徹底的行動主義では、私的出来事は捉えにくい曖昧な場合が多いのでその制御は難しいと考える。ある人が自分の私的出来事について語る場合（この行動を徹底的行動主義では私的出来事のタクトと呼ぶ）、その語りを他者である聞き手が承認できるのは（徹底的行動主義ではこれを般性強化と呼ぶ）、私的出来事に対応した公的刺激や公的反応が私的出来事を語っている発話者の言語行動に付随している場合に限られる。そして、私的出来事の制御によって公的行動が制御されるとは考えない。それぞれの行動は独立の強化随伴性によって制御されると考える。

仏教の行動の制御法に話を移すが、八正道は行動の制御法と見ることができるかもしれない。八正道は、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、および正定の八つの項目で構成され、後述する涅槃に至るための修行方法をルール化したものである。正見は正しい見方をする、正思は正しく考える、正語は正しい言語を使う、正業は正しく身体を使う、そして正命は正しい生活を営む、正精進は正しく努力する、さらに正念は正しく省みる、正定は正しい精神統一をする、ということであり、八正道はまさに人の行動の制御を意味する。ここでの「正しい」行動とは、社会的な価値や個人の嗜好によって決定されるものではなく、その行動が宇宙全体の真理⁴⁾に合っているかどうかによって規定されるものとする。仏教が説明する「正しい」行動と、徹底的行動主義が主張する「正しい」行動はもしかしたら異なるかもしれない。徹底的行動主義で「正しい」行動とは、人間の社会や文化によって規定される行動である。すなわち、自然選択による種の進化の視点からみて、個体と、個体が属する集団のそれぞれの生存可能性（生存価）を高めるような行動である。

ところで八正道は、釈尊によって規定されたものというよりは、釈尊が解脱にいたった道筋を後世の仏教徒がルール化したものと考えられる。そしてその機能は、仏道修行に励むためのまさにルールであり、その最終的な目的は、この世に生きることに伴うさまざまな苦からの解脱であり、後述される三法印の自覚である。八正道の修行の過程ならびに最終到達地点を徹底的行動主義の立場から述べるなら、釈尊が釈尊自身の行動履歴から体得した解脱のための随伴性をタクトしてルールにしたものが八正道であると言えるだろう。そして、仏道修行者はそのルールに従った行動をすることで（すなわち仏道修行に励むことで）、そのルールの制御から解放されて真の解脱という随伴結果を経験することになるのだろう。

八正道で規定されるルールは、要約すれば、中道⁵⁾の実践ということになる。これを徹底的行動主義の言葉で語るなら、行動は、過不足なく適度な強化を受けなければならないということになるであろう。しかし、仏道修行者の行動が八正道というルールに縛られている限り、その行動は自由自在ではない。ルールの機能の一つに行動の獲得が速やかになるというのがある。したがって、八

正道に規定されたとおりに行動しても、解脱への近道はやはり八正道に従うということになるのである。

ところでそのような苦しみからの解脱の境地というのはどのような境地なのであろうか。仏教では、そのような境地は三法印の自覚と説明される。三法印⁶⁾は、諸行無常、諸法無我、涅槃寂静であり、「法のしるし」として仏教の教えや立ち位置を特徴づける(井上, 1961)。諸行無常は、すべての事物が常に変化すること、諸法無我は、すべての事物の性質や存在は他との相互作用で決定されること、そして涅槃寂静は、あらゆる執着がない状態である。八正道が実践されることで三法印が自覚される。この自覚のもとでの行動は、八正道のルールによって制御されていないが、そのルールに対応した自由自在の行動ということになる。ただし、ここで語られる自由とは自由意志という意味での自由ではない。

仏教では、人の行動は諸行無常と諸法無我によって制御されており、行動の制御を決定づける自由なる意志の存在を否定する。その点は、人の行動は環境とのかかわりによって決定されるのであって、自由意志なるものは存在しないとする徹底的行動主義の立場と共通である。

上で述べてきたように仏教と徹底的行動主義の間にはかなりの共通点がある。しかし異なる点もある。特に強調したい点は、因果に対する考え方である。人の行動を決定づけるものは自由なる意志ではないという点で両者は共通するが、仏教では因(原因)よりも、この宇宙に存在する事象の全ては孤立して存在しているのではなく、互いの相互作用によって存在するという「縁」の視点を強調する。それゆえに諸法無我なのである。人の行動もそうであって、一つの要因によって規定されるわけではない。過去生の因縁までも仏教では考えている。その考えが輪廻転生へと発展する。徹底的行動主義では、人の行動の制御因は、その個体の過去と現在のそれぞれの行動随伴性であるとする。とくに過去の随伴性として、生物の進化の過程である系統発生的随伴性(phylogenetic contingency)と個体発生的随伴性(ontogenic contingency)が考えられている。さらに、人の社会的行動の産物としての文化的随伴性(cultural contingency)も人の行動の制御因として考えられている。いずれも行動に先行する弁別刺激、さらに行動に随伴する後続事象としての強化刺激によって人の行動は制御されると考えている。環境と行動の機能的な関係の複雑さを仏教における「縁」と言えば言えるかもしれないが、そのような解釈が妥当であるかどうかは不明である。仏教が因縁を強調しているのに対し徹底的行動主義においては、あくまでも行動と環境の関数関係が強調されているという点で因果律が主たる考えとなっていると考える。

最後に、人の行動の制御を検討する上で欠くことのできない言語行動について両者の考えを述べる。仏教は、その教えを口誦によって、あるいは「経」によって後世に伝えてきた。したがって仏教では、言語行動は人の行動を制御する上で重要な行動であるとみなされている。しかしその一方で仏教は、宇宙の真理が言語行動によって完璧に説明できるわけではないと主張する。釈尊は、いわゆる音声や文字といった言語刺激には依らない方法で彼の教えを伝えたことがあるという。一方、徹底的行動主義は、言語行動を同じ言語共同体の他の成員のオペラント行動によって強化されるオペラント行動と捉え(Skinner, 1957)、言語行動が人の行動を制御する重要な行動であると認めている。しかし徹底的行動主義は、言語による人の行動の制御は、その行動の随伴性に由来するため、最終的に随伴性の制御に委ねられる制御であると説明している。したがって、仏教も徹底的行動主義も、言語による行動の制御の有効性を認めつつも、その制御が人の行動の本質的な制御ではないとしている点は同じである。

以上、仏教と徹底的行動主義のそれぞれの人の行動と行動の制御に対する捉え方を論じた。それらの内容をまとめると表1のとおりとなる。

表1 人の行動とその行動の制御についての仏教と徹底的行動主義のそれぞれの視点

	仏教	徹底的行動主義
行動の定義	生きることそのもの。ただし、精神的活動と生きるという行動を分離して考えているかもしれない。	生きることそのもの。精神的活動も生きるという行動の中に含まれ、それを私的行動とする。
行動の制御	私的行動の制御による公的行動の制御を語っているように思うが、公的行動の制御によっても私的行動の制御が可能になると語っている。八正道や律というルールによって仏道修行に関わる行動を制御する。中道の実践こそが行動の制御。	私的行動の制御には、公的行動の制御と同じ原理が作用している。それは弁別刺激と強化刺激による制御である。
「正しい行動」の定義	諸行無常と諸法無我の認識に基づく行動であること（哲学的認識）	個体と、個体が属する集団の生存価を高めるような行動であること（生物学的認識）。
行動を制御することによって生じる成果	苦しみからの解脱、諸行無常と諸法無我の自覚、涅槃寂靜の境地（宗教的解釈）	個体の生存可能性ならびに個体が属する集団の持続可能性（生物学的解釈）
行動と行動の制御因の関係	事象間の因縁的關係	環境事象と行動の因果的關係
自由意志の否定	涅槃寂靜、苦からの解脱	随伴性による行動の制御
言語による行動の制御	言語による行動の制御の有効性を認めつつもその限界を明記	言語による行動の制御の有効性を認めつつもその制御は二次的であって、最終的に行動は随伴性の制御に委ねられる

人の行動の制御について徹底的行動主義が仏教から学ぶ事柄

仏教と徹底的行動主義が、人の行動と、人の行動の制御についてどのように捉えているのかを論じた。その結果、表1にあるように、共通するものがある一方で異なる点もあった。その相違点は、一方が宗教、他方が科学哲学という違いによるものかもしれない。したがって、徹底的行動主義は仏教から学べる点があるはずである。

本論文では、人類、否、生きとし生けるものすべての生存可能性を高める事柄に関連して人の行動の制御の問題を議論してきた。したがって以下の議論は、徹底的行動主義は、人の行動の制御にかかわる問題について仏教から何を学べるかという議論になる。

徹底的行動主義は、人類が文化を形成してそれを発展させてきた背景には言語行動の関与があると説明している。行動分析学の用語で語れば人はタクト⁷⁾によって文化を形成し、それを発展させてきたとなる。すなわち人類は、声帯の振動による発声行動にオペラントとしての機能を持たせることで言語行動を発達させ、それを拡張させて、タクトされる環境事象に直接接触していない聞き手や読み手に時空を超えた virtual な環境事象との接触を可能にした。これが文化の形成と発展を可能にしたのである。したがって文化は、言語による行動の制御によって発展したと言えるのである。その方が行動の獲得がすみやかに行われるからである。

しかし言語による行動の制御が強くなると、随伴性の変化に対する個体の行動の感受性は低くなる。言い換えるなら、言語によって制御される行動は随伴性の変化に対応しにくくなる。これは行動分析学の研究によって明らかになった事実である。

人類が、二酸化炭素を大量に排出させて地球温暖化を招くようなことをしたり、砂糖を大量に摂取して健康を害したり、地球上のすべての生物種を絶滅させるほどの核兵器を開発したりしたのは、まさに言語による行動の制御の成果である。しかし残念ながら人類は、それらの問題行動を制御する行動を十分に獲得していない。言い換えるなら、そのような問題行動を抑制制御するための行動を系統発生的随伴性によって獲得していない。つまり、文化あるいは文明の急速な発展という随伴性の変化に対応した適切な行動の獲得が文化の発展に追いついていない。この問題に対して人類は、ルールという言語による制御を試みようとしている。しかし、これは火に油を注ぐようなものである。

徹底的行動主義の視点にたつ行動分析学の研究によって上のようなことが分かっているのであれば、不適切な問題行動の制御は可能であるはずである。しかし、そのような制御を可能にする文化の構築を Skinner (1974) が提唱しても、それが実際に可能であるのかどうかは疑問である。なぜなら、やはり言語による行動の制御に人は頼ろうとするからである。これが、人の行動の制御に関する徹底的行動主義の視点の限界であるかもしれない。しかしこの限界こそが、徹底的行動主義が仏教から学ぶべきポイントであると考えられる。

行動の制御について、徹底的行動主義が仏教から学ぶべき事柄を考察する前に、改めて本論文が問題にしている行動の制御の本質について徹底的行動主義の視点から議論したい。上で述べた未曾有の問題に直面している人類は、行動的に言えば、一人一人の人間が衝動的な行動ではなく自己制御と言えるような行動を選択することが求められていると言えるだろう。この2種類の行動を説明するには、それぞれの行動についての短期的な強化随伴性と長期的な強化随伴性の両方を考慮する必要がある。

仮に2つの行動 A と B があるとする。行動 A は短期的な随伴性では小さな強化子が関わるが、長期的な随伴性では大きな弱化子がもたらされる行動である。たとえば甘い物を摂取するといった行動などが挙げられる。一方、行動 B は短期的な随伴性では小さな弱化子が関わるが、長期的な随伴性では大きな強化子がもたらされる行動である。歯を磨いたり、歯医者にいったりする行動などがその例として挙げられる。ある時点で個体がこの2つの行動 A と B のどちらかを選択しなければならない場合、行動 A を選べばその個体は衝動的な選択をしたことになり、行動 B を選べばその個体は自己制御の選択をしたことになる。衝動的行動と自己制御について徹底的行動主義では上のように説明する。

人類が抱えている世界的な問題が人の行動の問題である以上、その問題は衝動的行動と自己制御の選択の問題と言えるだろう。そうであれば、本論文で志向する行動の制御とは、いかにして人が自分たちの衝動的な行動を抑制して、代わりに自己制御を促進するか、という制御と言えるだろう。

その制御方法について、徹底的行動主義者である Skinner はいろいろ述べている（例えば、Skinner, 1953）。しかし、その制御が人為的であると、人はそれを拒絶する。Skinner (1971) は、弱化や脅迫といった人為的で嫌悪的な制御から人は自由であるべきだが、制御されることから逃避したり回避したりしようとしても行動の問題は解決されない、個人や、個人が属する集団にとって最大の利益がもたらされるためには、体系的な「正の強化」の随伴性が構築される必要がある、と主張した。しかし彼は、人類が現在抱えている行動の問題は「正の強化」の随伴性による行動の制御が困難な状況であって、その解決は容易ではないと見ていた。Skinner は、その解決には、政治、産業、宗教といった分野のリーダーたちの行動が助言や警告といったルールによって支配される必要があり、

そのためには、そのようなリーダーを育成するための教育が必要であると主張した (Nye, 1992 河合 1995 を参照)。しかし、そのような助言と警告、さらに具体的な教育の方法について彼は述べていない。その方法こそが、徹底的行動主義が求めている行動の制御法ではないだろうか。

行動の制御について徹底的行動主義の視点から見た上の議論から、人類が今必要としている行動の制御は、①衝動的な選択を抑制して自己制御の選択を促す制御であり、そして、②そのような制御は、政治、産業、宗教といった分野のリーダーたちの教育によって可能である、と言える。そうであれば、徹底的行動主義は、仏教の何からそのような教育方法を学ぶことができるのだろう。いよいよその事柄について考察する。

既に述べたように、仏教における行動の制御は八正道の実践である。仏道修行する者の行動は、まず八正道の教えや律というルールによって支配される。短期的な随伴性ではその行動は小さな弱化学子が関係するだろうが、長きにわたって八正道を実践することで長期的な随伴性の高いなる強化子である三法印の自覚、涅槃寂靜の境地に至る。すなわち苦からの解脱 (Skinner の言葉で言えば、弱化学や脅迫といった嫌悪的な制御からの自由の確立) に至る。そうであれば、八正道を行動的に翻訳して、それを政治や産業、さらに宗教を学ぶものにも実践させる教育こそが、徹底的行動主義が仏教から学ぶ行動の制御ということになるのではないだろうか。ただしそのような教育で気を付けるべき点も仏教から学ぶべきだろう。その一つはルール支配から随伴性による制御への移行を速やかに行うべきであるということ、もう一つは、行動を説明するための徹底的行動主義の用語にこだわらないということである。

前者の「ルール支配から随伴性による制御への速やかなる移行」について述べる。八正道が語る「正しい行動」と、徹底的行動主義が語る「正しい行動」の違いについてはすでに述べた。その違いを理解しないで、ただ「正しい行いをしろ」と教育しても、それは単に倫理的に正しい行動について語っているだけで、まさにルールによる制御のみを期待した教育となるだろう。八正道で語る「正しい行動をしろ」は、「自然 (ジネンと読む) に立ち帰れ」ということであり、これを行動的に翻訳すると、おそらくそれは「随伴性に委ねろ」ということになるのではないだろうか。その意味で、ルール支配から随伴性の制御への移行を速やかに行うような実践教育が必要であると考えられる。

次に、後者の「行動を説明するための徹底的行動主義の用語にこだわらない」について述べる。宗教であっても科学哲学であっても、それらは人の行動の営みである以上、言語による行動の制御が重視される。仏教の場合、言語によって規定される行動の教育は「経」に基づく。徹底的行動主義の場合、行動分析学の概念に基づく。しかし、いずれの教育も言語による行動の制御である限り、その制御は随伴性による制御から乖離する。仏教、特に禅では、言語による制御を超えた制御を志向している。徹底的行動主義もそれにならって行動分析学の従来の概念規定にこだわらない行動の制御が必要である。

以上、徹底的行動主義が仏教から学ぶ事柄について考察した。その結果、学ぶべき事柄は、仏教的な視点に立って衝動的行動を抑制して自己制御を促進させるための教育の実践であると言えるだろう。そして、そのような教育は、森 (2013) が指摘しているように、人間が文明の過ちを反省し、自然 (ジネンと読む) に立ち帰ることを可能にする教育であると言えるだろう。

謝辞

本論文作成にあたり、仏教の論述に対して制御工学の第一人者である東京工業大学名誉教授なら

びに日本ロボット学会名誉会長の森政弘先生にご叱正を求めました。先生からは大変貴重で有益なご意見とご忠告を賜りました。ここに深謝申し上げます。また、このような論文執筆の機会を提供してくださった立命館大学教授の望月昭先生にもお礼を申し上げます。

注

- 1) 本論文の仏教に関する論述は、仏教に対する筆者らの浅薄な理解に基づいている。仏教に関して間違っただ論述があれば、読者のご叱正を願いたい。
- 2) 森政弘 私信、2016年1月
- 3) 森(2013)の「仏教新論」は、仏教思想の核心を「二元性一元論」と捉えており、仏教を学ぶものにとって必読の書である。
- 4) ここで「正しい」という言葉の意味に関連して宇宙全体の真理について言及したので、行動に関わる真理について以下に考察する。仏教と徹底的行動主義では、行動にかかわる真理について解釈が異なるかもしれない。仏教では、諸行無常と諸法無我が真理であり、これが宇宙全体の成り立ちにかかわるゆるぎない真理であるという。しかし、徹底的行動主義で語られる真理は「行動についての原理」であり、これはもろもろの要因を度外視した場合の当該環境と当該行動の機能的な関係を記述したものである。したがって、環境条件が異なれば、その原理は成り立たなくなる可能性がある。この違いがまさに宗教で語られる真理と科学的な原理の違いと言えるものかもしれない。
- 5) 中道とは、苦と楽との両極端を捨てること、つまり極端におちいることなく、調和のとれた努力を続けることを意味する。中村(1977)は中道を実践的な教えと述べている。
- 6) 諸説においては、三法印に一切皆苦を含めて四法印とする場合や、諸行無常・諸法無我・一切皆苦を三法印とする場合がある。詳しくは平川(1968)を参照されたい。
- 7) 個体の身体内外の事象を報告するという言語行動で、この行動を制御する環境変数は、タクトされる環境事象であり、これがタクトの弁別刺激として機能する。また、もう一つの制御変数は、タクトに随伴する聞き手(読み手)の承認といった般性強化刺激である。

引用文献

- Bass, R. (2010). Zen and behavior analysis. *The Behavior Analyst*, 33, 83-96.
- Baum, W. M. (1995). Radical behaviorism and the concept of agency. *Behaviorology*, 3, 93-106
- Diller, J. W., & Lattal, K. A. (2008). Radical behaviorism and Buddhism: Complementarities and conflicts. *The Behavior Analyst*, 31, 163-177.
- Gakuska, C. (2003). Advancing behaviorism in a Judeo-Christian culture: Suggestions for finding common ground. In K. A. Lattal & P.N. Chase (Eds.), *Behavior theory and philosophy*. New York: Kluwer Academic/Plenum, pp.259-274.
- Gould, S. J. (1999). *Rocks of ages: Science and religion in the fullness of life*. New York: Ballantine Pub.
- 平川彰(1968). 諸法無我の「法」 印度學佛教學研究, 16, 870-885.
- 井上善右エ門(1961). 「唯識大乘を中心としたる仏教の倫理学的研究」の概要 兵庫農科大学研究報告 人文科学編, 5, 1-18.
- 森政弘(2013). 仏教新論 佼成出版社
- 中村元(1977). 仏教語源散策 東京書籍
- Nye, R. D. (1992). *Three psychologies: Perspectives from Freud, Skinner, and Rogers*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole. (河合伊六(訳)(1995). 臨床心理学の源流—フロイト・スキナー・ロジャーズ 二瓶社)
- 佐々木閑(2013). 仏教は宇宙をどう見たか アビダルマ仏教の科学的世界観 化学同人
- Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. New York, NY: Macmillan.
- Skinner, B. F. (1957). *Verbal behavior*. New York: Appleton-century-Crofts.
- Skinner, B. F. (1971). *Beyond freedom and dignity*. New York: Knopf.
- (スキナー B. F. 山形浩生(訳)(2013). 自由と尊厳を超えて 春風社)
- Skinner, B. F. (1974). *About behaviorism*. New York: Vintage Books.

- Williams, J. L. (1977). *Zen and behaviorism: Some comparisons*. Paper presented at the meeting of the Midwestern Association for Behavior Analysis, Chicago.
- Williams, J. L. (1986). The behavioral and the mystical: Reflections on behaviorism and eastern thought. *The Behavior Analyst*, **9**, 167-173.
- Worrall, J. (2004). 'Science discredits religion', In M. L. Peterson & R. J. VanArragon (eds.), *Contemporary debates in philosophy of religion*. Malden, MA: Blackwell, pp.59-72.

渡辺 修宏 (水戸看護福祉専門学校教員)

森山 哲美 (常磐大学教授)

